

## 前言

本プロジェクトの目的と意義は、以下の点にあった。

「本研究は、近年陸続と発表される新出の唐代墓誌などを用い、唐代知識人と洛陽文化との関係を研究する。唐の洛陽は長安とならび東アジアの文化を牽引する都市であり、日本の文化にも大きな影響を与えた。岡山市は洛陽市と国際友好交流都市の関係を結んでおり、今日でも洛陽との関係は深い。その意味で、本研究は中国文化研究のみならず、日本文化研究や地域の国際交流にも資することがあると期待される」。

具体的には、以下のような研究計画を立てていた。

「関係教員ならびに大学院生による定期的な研究会を開催し、共同研究をすすめる。また墓誌など洛陽研究の最新の資料を入手するため、年度内に洛陽を訪問し、洛陽師範学院河洛文化研究所、洛陽博物館、千唐志齋などを調査するとともに、洛陽の遺跡のフィールドワークや現地の研究者との交流をおこなう。成果の一部は本学発行の『中国文史論叢』にも発表する」。

上記の課題と計画は、定められた二年の間にほぼ果たされた。

2009年12月、洛陽に調査に赴くことにより、主として、以下の成果がもたらされた。

①白居易遺跡を中心として、その現状を具さに確認し、洛陽在住の学者の協力を得て、『白居易研究年報』10(勉誠出版、2009.12)などを通じて、現状を多くの研究者と興味をもつ方がたに伝えた。②最新の発掘成果と古文献に見える記述を精密に比較考量することで、洛陽城市の建設についての理念のぶつかりあいが見えてきた。③洛陽における洛水・伊水という二大河の存在の大きさに気づいたことから、洛陽の異界性に注目した小説が多いことを発見した。

また、研究会は、2009年に計3度開催され、東洋史・中国文学を中心とする多数の大学院生の参加も得て、この研究の成果を共有することができた。

以下、この報告集では、その成果の主なものを発表させていただく。